災害ボランティア活動のスキル　　2011 年塚原作成

自然学校の特色
１．高いコミュニケーションスキル
２．チーム力があり、全国ネットワークがある
３．ミッションスピリッツがあり、社会の課題に応えようとしている ex.地域づくり

傾聴　「事柄よりも事情」「内容よりも気持ち」に共感する
津波＝内容　体験を共有していないから共感はできない
悲しい＝気持ち　共有できる

ジョハリの窓
作業力（大工仕事ほか）
段取り力
集団生活のマネジメント
体験学習法（トライ＆エラー）
コーディネート力（自分にできないことは助けを求める）

自然体験のリスクマネジメントは災害ボランティアのリスクマネジメントにそのまま読み替えられる。

生活の基礎技術
企画の５Ｗ１Ｈ
「行くぞ」の一言で必要なモノをそれぞれの判断で用意できる（セルフスタンダード）
指示待ちではなく、自分で動ける
知らない人にも挨拶ができる
自己完結できる
ホウ・レン・ソウ
地域をみる視点をもっている
根性がある
役割・立ち位置の判断ができる（チームワークにおけるメンバーシップを心得ている）
現実的（「今日、雨が降るべきではない」などという）
物事が展開していく想像力に長けている
どこでも寝れる
現場力が豊か
ポジティブシンキングができる

現地を下見する習慣が身についている
作業をプログラムにする力がある
チャレンジ・バイ・チョイスを心がけている
セルフエイドの意識付けができる
KYT の習慣が身についている
逃げ場や安全確保を事前に用意する段取りを経験的に知っている
枕木を運ばせるトレーニングだけで、その人の安全スキルを把握できる
通常のボランティアは危険予知の丁寧な共有作業が必要のないレベルの危険しか存在しない内容に留めては？
ボランティアのオリエンテーション資料として、これらのスキルのキーワードをまとめたい

RQ ボランティアセンターにおけるリスクマネジメント

日時：４月２６日(火)　９：１５～１１：００
場所：国立花山青少年交流の家大研修室
進行：中野　民夫
内容：ボランティア活動や RQ の組織として考えられるリスクとその対応策を共有する
対象：RQ 災害ボランティアのコーディネーター

セッション１：小グループワーク
・4 グループに別れての、考えられるリスクのアイデアフラッシュ。KJ 方による、出てきたアイデアのグルーピング作業

セッション２：全体発表

セッション３：広瀬さんからの総括
身体的リスク、精神的リスク、関係性のリスク、組織的なリスクの４つのついて講義。
RQ コーディネーターの役割りは関係性のリスクのマネジメントである。

- 身体的リスクは、基本的にセルフエイド(自己責任)。しかし、安全管理の情報やルールなど判断基準は RQ から伝える必要あり。
- 精神的なリスクは、個々人での差が大きくコーディネータとして関与するのは難しい部分
- 関係性のリスクは、被災者、地域住民、ボランティア同士の関係などがある。この関係性作りや潤滑油的な役割りがコーディネーターに求められる部分が大きい。
- 組織的なリスクはシステムで解決していく。東京本部との連携など。

セッション４：全体討議
グループの発表と広瀬さんの話をうけて全員で、討議。
・リスク管理からボランティアコーディネートの話へ発展した。

誰でもリーダー、班長虎の巻(ガオー!!)　RQ 河北塚原作成

2 日目からは誰でもリーダーだ！！みんなでボランティア活動を作り上げよう！！

★現場リーダーは、一歩先のことを考えて、半歩先のことをする。
★コーディネーターは 2 歩先のことを考えて、1 歩先のことをする。
★大切なことは、事前の段取りと、情報収集と共有です、当日は次のことを考える。
★総務さんと、コミュニケーションをとりましょう。
★　標準化をはやく行う。（道具の名前、土地の名前、作業の手順など）

下に基本的なことは書きますが、決してマニュアル人間にならないようあくまでも参考にしてください。

ボランティア 1 日目
・道具の名前を覚える、作業の流れを体験する。2 日目以降のことを考える。1 日目の活動で翌日の下見をしておく。

ボランティア 2 日目、リーダーや、班長をやる場合。
事前

- 初めて入る地域の場合は区長さんや総代の人にあいさつする。継続して行っている地域は前のリーダーから情報を引き継ぐ。
- 事前に下見をして、必要な人数と使う道具の種類と個数の見立てをする。
  水場やトイレの確認も必須です。携帯の電波状況も確認。
  トイレが集落全体に無いなら、住民から行政に仮設トイレの設置をお願いしてもらう。
- 他団体との共同の場合、連絡先を交換しておく。（待ち合わせ場所や当日の連絡用）
- 人員移動や物資搬送のための車の配車を確認しておく。

当日

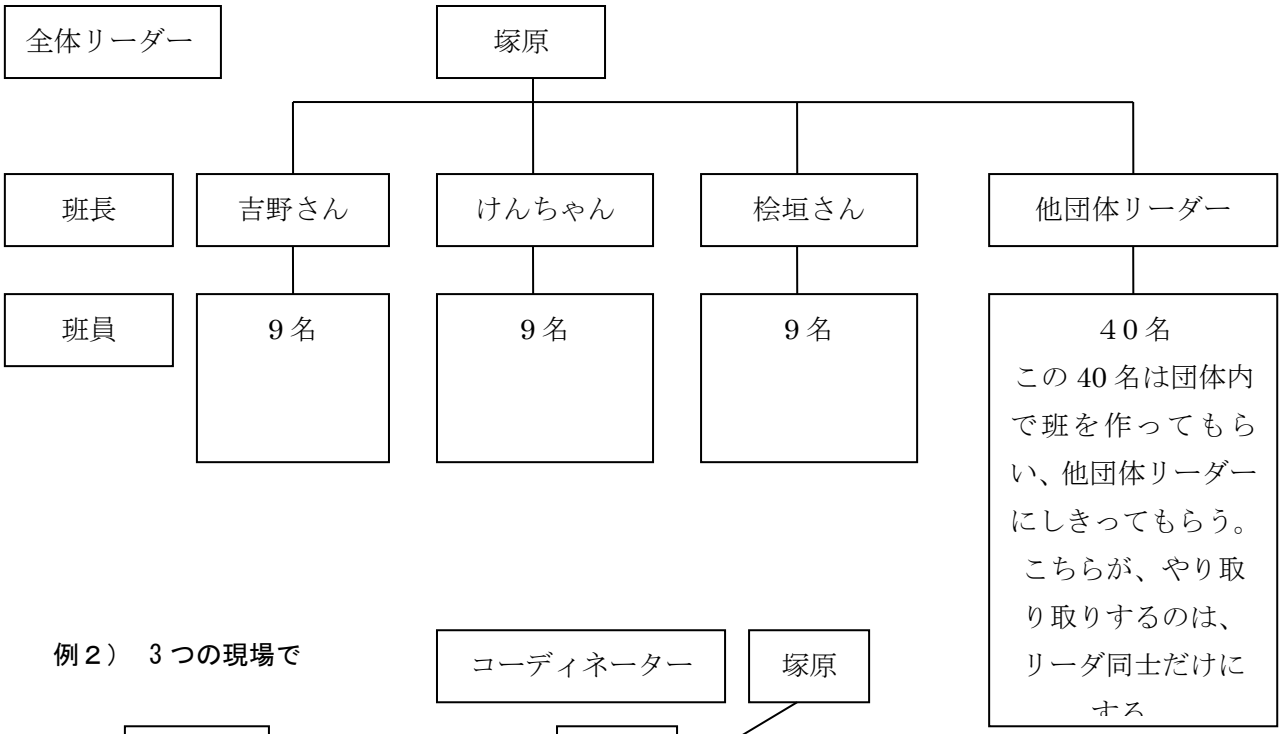
- 作業人数が多い場合は、10 人 1 組など班編成をして各班に班長を立てる。作業中は全体リーダー→班長→班員の経路で指示を出す。
- 大きな余震や津波のくる恐れがある場合の避難場所を全員で確認する。
- 作業前に装備のチェック、あまりにも不備のある人は活動を控えてもらう。
  （ヘルメット、マスク、ゴーグル、グローブ、長袖、長ズボン、長靴が基本）
- クギの踏み抜き防止やガレキでの切り傷予防の話をする。
- ケガをした場合の病院搬送についての話をする。
- トイレと昼食をとる場所の確認をする。

- 現場での道具の置き場所と片付けの説明をしておく。
- 50 分活動したら 10 分休みくらいのペースで活動する。
- 作業後は人数の確認と道具の数を確認して帰ります。（班長からの報告をもらう形でよい）

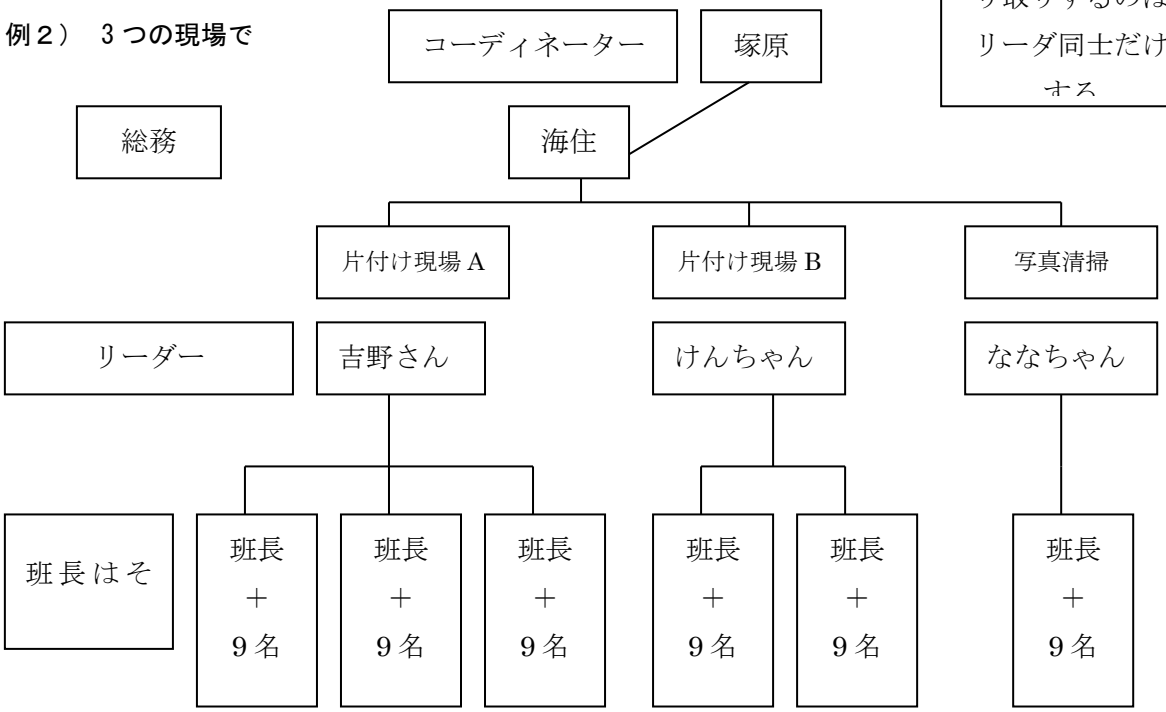
例）例えば、下の図のように人員を配置すれば、1 人のリーダーで 70 名のボランティアを動かすことができます。
ポイント①班編成と班長さんを立てるということです。
ポイント②指示の経路を 1 本化する。リーダーは班長にだけ指示をだし、班員への指示は班長にお願いする。また、報告も班長からリーダーに上げてもらうようにする。

ボランティア活動はシンプルな作業が基本ですので、誰でもリーダーや班長できます。
長期で活動できる人は少ないので、短期間の活動の方でも、被災地のためですから、積極的に当日のリーダーや班長をやってみてください。

例１）　一つの現場で 70 人が活動する



例２）　3 つの現場で



持ち物

・　筆記用具、ノート
・　活動シート

ニーズを拾うときの注意

・　新たな地域に入るときは、区長さんや総代さんを通しましょう。
・　住民の方の連絡先などを聞くときは、下の名前を必ず聞きましょう（地域は同じ苗字が多いので）

作業のコツ

・　安請け合いはしないように。どこまでの内容の活動を請けるかは、コーディネーターと事前に相談しておく。分からない場合は、１人で勝手に判断しないで持ち帰って、相談してから回答する。
・　水場が無いときは、２００リットルの水タンクなどを、軽トラなどに乗せて汚れたスコップなどの洗い水としましょう。セメントの船があるとそれに水をためて洗えるので便利。なければ一輪車を船の変わりにしましょう。手洗い水は２０リットルのタンクを２つくらい持っていく。消毒ジェルも有効です。

災害救援
51-34

◆ 夏の生活と作業で気をつけること◆　　2011 年塚原作成

★食中毒★

① 料理の量はその日のうちに食べきれる量を作る。足りない場合はカップめんなどで対応する。

② 地域の方からの差し入れなどは、すぐにいただきましょう。とっておいて捨てることになるのが一番もったいないです。

③ 特にカレーなどの大鍋料理は、ふたを開けたときなどに細菌が入り、量が多いと加熱不足になるので、必ずたべきる量を作ってください。

④ トイレのドアノブなど多くの人が共通で触る場所から感染します。掃除の際はその辺を良く掃除しましょう。

★熱中症★

① 睡眠不足は大敵です。自分の体調管理は自己責任です。体調が悪い場合は作業へは出ずに休みましょう。

② のどが渇く前に、こまめに水分を補給しましょう。

③ 基本的に 50 分で 10 分休むようにしましょう(気温や疲労具合で臨機応変に対応)

地域の方への配慮にご協力ください。

RQ 河北　塚原　俊也

□夜の過ごし方

夜９時以降は、外で歩いたり、会話をしたり、携帯電話をかけたりするのはやめましょう。（地元のひとにとっては、地域全体が自分の家や庭みたいな感覚でいるものです。どこの誰かもわからないボランティアが夜の暗闇の中を散歩したり、夜に男女がいっしょに歩いていたりすると、不安だし不審者にも間違えられます。

それが、例えホタルを見たり、大事な電話で話していたり、正当な理由であっても、見た目からはわかりません。しかも、高齢の方が多くはやく休む方もいるので、9 時過ぎは夜中だとおもってください。

公民館で総務の人が仕事をしていても、あのボランティアたちは夜中まで電気をつけて何してるんだと思う方もいるのです。

地域の多くの方は、ありがたいことに私たちを受け入れてくれています、しかし、中には不安に思う人もいるのです。

地域事情を理解した上で、生活してください。配慮に欠ける方はお引取り願います。

□飲酒について（未成年は当然禁酒です、周りの人も年齢を確認して飲ませないで下さい）

RQ 河北では飲酒は禁止にしていません。他のボランティアベースでは飲酒禁止のところもあります。

飲酒を OK にしている目的は、息抜きももちろんですが、ボランティア同士の親睦を深めることと、明日以降へのボランティア活動の意見交換の場にしてほしいからです。

お酒に飲まれたり、騒いだり、寝る人の邪魔になるほどの声で話す人は禁酒してください。

□施設の借用について

借用している、施設は地域の方の厚意でお借りしています。なぜ、ボランティアが地域の公民館を占領しているんだ、ボランティアはテントで寝泊りするのがボランティアという考えを持っている人もいます。その点 RQ 河北は大変恵まれた環境で暮らしています。

私たちが公民館やお寺を借りている間、地域の方々が私たちに遠慮して、地域の行事を別の施設で行ったことも一度ありました。（借りる前に行事があるときは、施設を開けますと話していましたが、地域の方が遠慮してくださったのです。ここはそういう遠慮深い土地なのです。「開けると言っていたのに」とかそういう問題ではないのです。私たちがいるだけで地域には多少の負荷を掛けているのです）そういう中で、理解をいただいてボランティア活

動していることを忘れないで下さい。

これらの事情は長期短期関係なく全てのボランティアが理解することです。

特に 6 月いっぱいの活動に関しては、緊急的なボランティア活動ということで、一部の役員さんだけで即断即決していただいて、お借りしていました。本来なら、地域の会議に掛けてから決めることを、活動を理解していただきすぐに貸してもらえることになりました。なので、地域全体がボランティアの施設利用を正しく理解はしていません。（光熱費の負担が公民館の会費から出るのではないかと心配している方もいます）→これらのことは 7 月 9 日に区長さんから、皆さんに説明していただく予定です。

□地域の人は見ています！！！！

地域の方は、私たちのことを**見ていないようでしっかりと見ています**。特に、普段関りの無い人も驚くほど見ています。そして、悪いうわさほどすぐに広まります。あっという間に一人歩きします。

だから、地域を歩くときは、私たち RQ ボランティアの所在と責任を果たすためにも、できるだけビブスをつけて歩いてください。それが、他の不審者との区別にもなります。

◆今までいろいろな災害がありましたが、災害ボランティア活動がこれだけ長期化することは多分初めてです。だから、いままでの RQ ボランティアの仲間たちが積み上げた活動や信頼をこれかも、みんなでつないでいきましょう。

【RQ を支えるボランティアリーダーの声】

（タイトル）
地域再生の拠点として、活動することを目指して

RQ 河北ボランティアセンター：塚原俊也さん

（本文）
みなさん、こんにちは。くりこま高原自然学校の塚原です。河北で活動を始めたのは、4 月 1 日だったと思います。

河北 VC は、これまで地元の公民館をお借りしていましたが、現地では今、ちょうど引っ越しをしています。引っ越し先は築 70 年ほどの古民家です。近くに水田が広がる日本の典型的な里山という、素晴らしい環境のなかでボランティア活動をしています。将来は、ここで地域再生の拠点となる機能を持った自然学校として活動していくことが、エコセンや RQ の使命にもつながっていくかなと思いながら、第 2 フェーズを迎えています。

石巻にベースを持つ NPO、NGO と連携した活動を展開

河北の特徴は、石巻災害復興支援協議会に登録している NPO や NGO、269 団体（6 月 22 日の時点）とともに、活動している点です。毎晩 19 時に代表者が集まり、活動の情報共有や翌日の活動の分科会を行っています。ちなみに昨日はちょうど 100 回目の会議でした。そのなかで、RQ はマッドバスターズと呼ばれる泥だしやガレキの撤去、漁業支援、そして心のケアなどを行っています。

活動地域内には、全校生徒 108 名のうち 70 名程が亡くなり、先生も 13 名中 1 名しか生き残らなかった大川小学校があり、家族を失った方がたくさんいます。VC には、拠点の近くに住んでいる地元の方がお茶を飲みに来てもらえる場をつくりましたが、僕らが話を聞いたり、一緒に活動することによって、間接的に心のケアができたらいいなと考えています。ここでは精神衛生福祉士の資格を持ったボランティアさんにも入っていただいて活動しています。

小中学生については、「春休みの宿題の面倒を見てもらえないか」ということから始まった勉強会を、夜 7 時から 1 時間やっています。大道芸ができるとか、天体観測ができるとか特技を持った方に勉強会に入ってもらって、ユーモアを交えながら勉強しています。

昨日からは、すでに歌津では行われている、泥だらけになった写真やランドセルなど、拾得品や遺品をきれいにして返そうという活動も始まりました。だんだん泥だしやガレキの片づけ以外の活動も増えてきている状況です。

この震災を機に、変わっていくべき社会の仕組み

子どもの活動については、子どもたち自身が、自分たちの住む地域の街づくりを考えるという活動を行っているNGO セーブ・ザ・チルドレンと連携しながら、「子ども街づくりクラブ」という企画を今後、進めていく予定です。

もともと東北地方はコミュニティの強い地域です。しかし、集落によってはコミュニティを解散し、町内会費を均等分けして散り散りになって、仮設住宅での暮らしが始まっています。ところが、地元の方々は、都会のように隣近所がわからない生活に慣れていないため、家のなかで孤立したり、新しく住む地域のコミュニティに加われないのではないかという心配があります。今後は河北VCで、サロン活動に出向くような支援もできたらと思っています。そして、そういった活動を地元の人たちの次の仕事につなげることも、RQ としてやるべきことかと考えています。

最後に上田紀行さんが書かれた『慈悲の怒り』という本を紹介します。地震と津波は天災でしたが、今回は原発の問題があって、原発は天災ではない、というようなことが書かれていますが、内容はぜひ読んでみてください。

今回2万人以上の方が亡くなり、行方不明になっていますが、日本は1年に3万人以上の人が自殺している国です。日本人としてこの災害をどうとらえるかということと同時に、そういう社会のゆがんだ仕組みも、この震災を機に変わっていくように考えていければと、個人的には思っています。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。